
TALES OF SCHOOL LIFE

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T A L E S O F S C H O O L L I F E

【Nコード】

N 3 4 1 7 B A

【作者名】

唐笠

【あらすじ】

これはテイルズオブエクシリアの主人公、ジュードを中心とした学園生活を描いた物語である。

果たして彼はその先になにを見出だし、なにを得るのか！？

そして、この物語に意味はあるのか！？

※作品内のCPは作者の偏見により構成されております

僕と学園と出会いの春（前書き）

ティルズの二次創作です！

実をいうと、ティルズの二次創作は初じゃなかったり…

タイトルがどこぞのバカたちが織り成す話に似ているのは仕様です
（笑）

僕と学園と出会いの春

ここは私立シッポ学園。

別にTAIL（尻尾）であってTALLE（話）ではないのでご了承願いたい。

まあ、何はともあれここは東西南北から色々と癖が強い人たちが集まる高校だ。

ある意味特色ある学校と言えるだろう。

そして、今年もそんな珍妙な学校の門を叩く生徒たちがやって来る。

「はあはあ……」

まずい！

このままじゃ入学式早々に遅刻だよ！

そんなことを考えながら、パンをくわえ全力疾走しているのはジュ

ード・マティス。この話の主人公である。

そこ、パンをくわえながら走るのはヒロインの役目とか言わないように。

彼はそれを散々ネタにされたのだからそろそろやめてあげてほしいものだ……

「うわぁ!？」

「おっと!」

しかし、お決まりのように曲がり角での衝突は避けられなかったようである……

しかも相手は受け身をとったのにジュードの方はしりもちをついただけだ。

大丈夫か、主人公……

「いたたた……」

「大丈夫か？」

この一見すると男のような台詞を言ってジュードに手を差しのべたのがミラ・マクスウェル。主人公っぽい言動が多いが立派なヒロインである。

「あっ、だいじょ……」

そう言ってジュードも差し出された手を掴もうと顔を上げるが、角度的にミラの短いスカート（パレオに見えなくもない……）の中が今にも見えそうなため言葉に詰まってしまう。思春期の彼にはこの上ないほどのダイレクトアタックだろう……

「どうしたのだ？」

まさかさっきので立てなくなってしまったのか？」

（今の状況にたちそうです…）

黙れムツリ。

そういった話題はどこぞのFクラスメンバーと話してこい。

「すまない、私も今は急いでいるためもたまたましてはいられないのだ」

「あつ、こちらこそすみません…」

「うむ。見たところ目立った外傷も無さそうだし大丈夫そうだな」

それだけを確認するとミラはそそくさと走り去ってしまった。

（きれいな人だったなあ…）

当の思春期真っ盛り君は遅刻目前だというのに彼女の走り去る姿をボーッと眺めていたのだった…

ジュードSIDE

「以上で入学式を終了する。各々、割り振られたクラスへ向かうように」

マイクを持ったクラトス教頭の言葉で入学式が締め括られる。
それにしても、入学式の日には寝坊はついてなかったなあ…

一応、間一髪のところ入学式には間に合ったけど、先生たちに目をつけられていないことを願おう。

そんなことを考えながら僕は自身の所属クラスである1-Aに向かっていた。

「あ、あの……」

そんな最中、僕にかけられたたどたどしい声。

その声に振り向けば奇妙な人形を抱えた少女がいた。

見た目的に高校生じゃないから、小学生が迷い込んでしまったのだろうか？

「どうしたの？もしかして迷子かな？」

「あつ、いえ…」

そうじゃなくて…1-Aの教室を探していて…」

1-Aと言えば、僕の向かう先と同じだが小学生にしか見えない彼女がそこに向かう訳がないだろう。

「ここは小学校じゃなくて高校だよ？」

「いえ…私はその…飛び級生で…」

「えっ…」

こちらの顔色を伺いながらも言った彼女の言葉が僕には信じられない

かった。

飛び級生と言えば、俗に言う天才のみに与えられる称号であり、自身の学力に見合った学年にまで進級できるといったものだ。

それは同時に彼女の目的地が僕と同じということを意味するわけで……

「なんだあ！

その不服そうな顔は！文句でもあるのか！」

思考の海をさ迷っていた僕に向かって彼女の抱えた人形がつつかかってくる。

……………

……………

……………

……………

「えええ！？

人形がしゃべったあああ！？」

「人形じゃなくてティポって言うんだぞ！」

僕の驚く声にびくついた少女とは裏腹に人形の方はなおも僕に挑戦的な眼差しを向けていた。理由はどうかあれ、自我を持っていることだけは確かのようにだ。

「ティポは…私の…友達なんです」

「そうだよ」

僕はエリーの友達なんだよ」

「エリー？」

さっきまでとは打って変わって間延びた声のティポに僕は首を傾げながらたずねる。

「その…エリーっていうのは私のことで……
本名は……エリーゼ・ルタスと言います」

「そ、そうなんだ…よろしくねエリーゼ。僕はジュードだよ」

「はっ、はい…よろしくおねがいます…ジュード」

一応、同じクラスになるのだろうからおかしくはない会話なのだが、
どうもエリーゼのびくつき具合が気になってしまう。

「とにかく教室に向かおうか」

「は、はい」

「優しい人がいっぱいいるといいねえ」

「そこらへんは大丈夫だと思うよ。たぶん…」

まあ、さすがにクラス中が不良ということもないだろうから大丈夫
だろう…

そう思い、いつの間にか辿り着いていた1-Aの扉を開ける。

「「双牙斬!」!」

ガギーーーーン!!

どうやら僕は教室を間違えたようだ。
認めないぞ…

僕は同じ顔をしてるやつが教室で争ってるのなんて決して認めないんだからな！

「ジュード…入らないんですか…？」

「とつととしろお！」

僕の後ろにいるためエリーゼとティポは教室内の様子を理解していないようだ。
それを幸ととるべきか不幸ととるべきか……

「エリーゼ、ちょっと待っててね」

「どこか行っちゃうんですか…」

「違うよ。

ちょっと教室の中に危険なところがないか確認してくるだけだからさ」

そう言ってエリーゼの頭にそつと手をのせると、僕は教室に入ってしまった。

「くらいやがれ崩襲脚！」

「甘いんだよクズが！紅蓮襲撃！！」

赤髪二人が懲りずにケンカを続けていた。

さすがにあのケンカにわってはいる勇氣はないので、周りを取り囲んでいる比較的話しやすそうな人物に声をかけてみる。

「あの、これっていったいなにがどうなっているんですか？」

「ん？」

あんたもAクラスか？」

「あつ、はい。Aクラスのジュード・マティスです」

なぜだか僕の質問が流された気がしないでもないが、自己紹介は必用だろうと思いついておく。

「よろしくなジュード。

俺はロイド・アーヴィング。んで、こっちにいるのがコレットとジーニアスだ」

ロイドの名乗った青年が人の良さそうな笑みを浮かべ、自身の後ろにいる二人の紹介をする。

「よろしくねジュード」

「こちらこそよろしくねジーニアス」

たったこれだけの会話だけどわかったことが一つある。

それは話しかける人を間違えたということだ。

たしかにロイドは悪いやつじゃないだろうけど、状況を分析するにはむいていない。その点、ジーニアスはそういったことが得意そうである。

「ジュードはワンちゃん好き？」

「わ、ワンちゃん…？」

「犬のことだよ？」

コレットが不思議そうに聞いてくるが、ワンちゃんが犬を示して
ることくらいはわかる。問題なのは、なぜこのタイミングで聞かれ
たのかということである。

「まっ、まあ…好きだよ」

「やったあ♪」

じゃあ、今度一緒にワンちゃんの餌やりしようね」

「う、うん…」

喜ぶコレットにおされながら生返事をする。

「コレット、餌やりもほどほどにしなよ…」

「大丈夫だよ♪」

「本当に大丈夫かな…」

この前なんて隣町まで行って野良犬に餌やりしてたじゃないか…」

あれ…？

もしかしてさっきのって気軽に引き受けちゃまずかったのかな…

「まあまあ、そんなに言わなくていいじゃないかジーニアス。

今度は俺も着いてくからさ」

「前回だってそう言っ、結局は寝坊して来なかったじゃないか…」

「あれ？」

そうだったか？

わりい、わりい、俺も悪気があってやったわけじゃないんだ」

「本当に今度はちゃんと頼むよロイド…」

呆れるように言うジーニアスに明るい笑みを浮かべるロイド、そしてすでに状況が呑み込めないのか、はたまたそれでいてにこやかな笑みを浮かべているのかわからないコレット。

「なんだか三人とも仲良いみたいだけど同じ中学校だったりするの？」

「ああ、俺たちは小学校からずっと一緒なんだ」

「家も近所なんだよ♪」

「と言っても、ここは全寮制だから関係ないんだけどね」

ジーニアスの言う通り、ここ私立シッポ学園は全寮制なのだ。
たしか僕は151室だったよね。

.....

.....

.....あれ？なんか

忘れてない？

「通牙連刃斬!!」

「空破絶風撃!!」

そうだった…

元々、同じ顔した人たちの奇妙なケンカの詳細を聞きに来たんだっ
た……

「ねえ…あの二人はいつたいなんなの？」

「ああ、あの二人はルークとアッシュと言って双子みたいだぞ」

「よく知らないけど、どこかの貴族らしいよ」

「そう…なんだ…」

言われてみればたしかに貴族の風格らしきものが漂ってなくもない。
ケンカしてて台無しだけど……

「それにしてもなんでケンカなんてしてるんだろう？」

「ケンカするほど仲がいいって言うから仲良しさんなんだよ♪」

もうコレットにはどこからつつこんだらいいかわからない…

「本人たちの好きにさせとけばいいよ。」

貴族だかなんだか知らないけど、僕は争い事は好まないからね」

「あははは…

僕もちよっとそういうのは勘弁してほしいかな」

なんだかジーニアスとは気が合いそうだなあ…

「だけど男同士の拳での語り合いも必用だぜ？」

だからと言ってあれはやりすぎなんじゃ…

「さすがに止めた方がいいよね…？」

「大丈夫だよ。勝手に止まるからさ」

「そういうもののなの…？」

「まあまあ、見てなつて」

ジーニアスの言うことが疑問ではあるが、一応二人を見守ることにする。

「飛燕瞬連斬！！」

「斬魔飛燕斬！！」

いつの間にか空中戦に発展してる…

このままじゃ設備に被害が出かねないよ！？

「ノクターナルライト！」

「うわぁ！？」

あっ、ヘソ出しが投げナイフで撃ち落とされた…

「ピアススライン！」

「ぐはぁ！？」

オールバックの方も矢で撃ち落とされてるよ…

「ルーク！」

あなたはもう少し静かにできないの！」

「アッシュもですわ！」

少しは周りの方の迷惑を考えてください！」

「ごめんティア…」

「すまないナタリア…」

さっきまで騒がしかった二人が途端に大人しくなる。なるほど、尻にひかれるタイプか…

「お騒がせしてすみません」

「これからはこういう事がないよう、二人にはよく聞かせておきますわ」

そう言ってティアとナタリアが頭を下げる。

ナタリアの方は話口調から察するにルークやアッシュと同じ貴族の出だろうか？

「そんなに固くならなかったっていいって。」

それよりも同じクラス同士仲良くしてこうぜ」

「みんな仲良しが一番だよ♪」

ロイドにコレットはフレンドリー過ぎやしないだろうか：

「あまり馴れ馴れしくするなよ。

あくまで級友として付き合うだけだ」

アッシュの方は偉そうだな：

それともこういうのをツンデレっていうんだっけ？

「俺様はルーク・フォン・ファブレ様だぞ。

なんでこんな平民なんかと付き合わなきゃいけないんだよ！」

こりゃ、アッシュ以上に酷い：

あのロン毛を切ってやりたい気分だ。

「ルーク、ちょっといいかしら」

「あつ、ちよつ、まてティア！

悪かった！俺が悪かったから許してくれティア！」

まあ、今のさっきなんだから怒られて当然だよね：

そんなことを思っただけで廊下に連れ出そうとするティアに引きずられていくルークを冷めた目で見てみると教室の扉が開く。

「おいおい、朝っぱらからお仕置きタイムか？

そういう殊勝なプレイは夜にしてくれよ」

「ぼ、僕ですけど…」

恐る恐る手を上げた僕にアルヴィンが近づいてくる。

「ほー、お前がジュードか…

優等生面してんなあ……」

「あの…僕のことなにか知ってるんですか？」

僕の顔を品定めするかのようにあごに手を当てて言うアルヴィンにたずねる。

「知ってるよ。ジュードって名前で俺のクラスの生徒だってことを」

「そう意味じゃなくて誰から僕のことを聞いたか聞いているんだけど…」

「ジュード君が廊下に放置したお姫様からだけど？」

「……………あっ…」

教室のごった返しですっかり忘れてた…

そう思い、急いでエリーゼのいる廊下に向かおうとした時、アルヴィンの後ろからちょこんとエリーゼが顔をだした。

「ジュード…忘れるなんて酷いです…」

「ジュード君の薄情者ー！」

「ごめん…エリーゼ、ティポ…」

なんか今日は失敗続きだな…

こんなんでも本当に大丈夫だろうか…？

「はいはい、ケンカはそこまで。

みんな席につけ。自己紹介を始めるぞ」

アルヴィンの一声でみんながぞろぞろと席につく。

えーと、僕の席はと………あつた！

僕の席は窓側の席で春真っ盛りの今は日光が暖かくて気持ち良さそうだ。

それにしても隣は空席だけど、入学早々に欠席なのかな？

「じゃあ、適当にまどが——」

ガラガラ

アルヴィンが言い終わる前に教室の扉が開けられる。

「はぁ…はぁ…遅れてすまなかった…」

そう言って入ってきた人は僕の予期せぬ人物だったんだ…

僕と学園と出会いの春（後書き）

教室に入ってきた人物とはいったい！？
えっ？

どこかのバカコメに同じ展開があった？
き、気のせいですよ…

次回もよろしくお願いいたします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3417ba/>

TALES OF SCHOOL LIFE

2012年1月8日22時52分発行